

堀河百首

蛭

難波江の草葉にすだく蛭をば

公実

あしまの舟のかがりとやみん

五月雨に草のいおりはくづねども

匡房

蛭と成るぞうれしかりける

あしづきのちどはまばらにかこひして

国信

照す蛭に闇もかくれず

草深み浅ぢまじりの泥水に

師頼

ほたる飛びかふ夏の夕ぐれ

大井川せぜにひまなきかがり火と

顕季

みゆるはすだく螢なりけり

夜てらす草の螢をあつめても

顕仲

みぬ世の事を尋ねしるかな

仲実

うさか川やそものをのかがり火に
まがふはさ夜の螢なりけり

俊頼

あはれにもみさをにもゆる蛍かな

声たてつべき此世と思ふに

師時

さみだれに草くちにけり我がやどの

よもぎが朶に蛍とびかふ

顕仲

雨風にあれのみまさる野寺には

灯がほに蛍とびかふ

基俊

ゆく蛍夏の夜すがらいかにして

けぶりもたええずもえ明すらん

永縁

いにしへはまどにあつめし螢をも
今は雲井の星かとぞみる

隆源

ながれゆく河辺にすだく螢をば
いさごにまじることがねとぞみる

肥後

ともし火とみゆる螢のひかりかな
むべ玉づさをかけてよみけり

紀伊

ふく風に沢べの草はみだるねど
光きえぬはほたるなりけり

河内

沢水に入れどもきえぬほたるかな

いかばかりなるおもひなるらん

「国歌大観」より